

会議録（要点記録）

第3回堺市南区教育・健全育成会議	
開催日時	平成29年8月10日（木）午後6時00分～午後7時22分
開催場所	南区役所 2階 201・202会議室
出席者	中村会長・大台委員・外村委員・竹井委員
欠席者	三木委員
事務局職員	南区役所 石井区長・隅野副区長 吉田課長補佐・船津主幹 田中係員 和田相談員・前田相談員・田中相談員
議題	1. 開会 2. 議事 平成29年度の審議事項について 3. 閉会
配付資料	【資料1】平成29年度南区教育・健全育成会議 中間報告（案） 【資料2】全国学力・学習状況等調査【全国・堺市・南区比較】 【資料3】保護者向け7つのやくそく（案） 【資料4】家庭教育手帳【目次抜粋】 【資料5】「こころの再生」府民運動

1. 開会

事務局

それでは、定刻になりました。ただいまから南区教育・健全育成会議を始めます。本日は、何かと御多用中のところ御出席を賜り、まことにありがとうございます。

まず初めに、本日は委員5名中4名の御出席を賜り、過半数を得ておりますので、本会議は成立しておりますことを御報告いたします。また、本会議は公開とさせていただきます。

なお、会議録を作成するに当たっては、正確を期すためにも議事内容について録音をさせていただきますので、御了承よろしくお願ひします。

それでは、案件に入らせていただきます。この後の進行は、中村会長にお願いします。

2. 議事

中村会長

皆さん、こんばんは。これより私が会議を進めてまいります。

平成29年度の審議事項について、議事に入らせていただきます。

最初に、事務局から資料の説明をお願いします。

事務局

(資料1～5について説明)

中村会長

それでは、これより会議進めていきたいと思うんですが、今日、とりたててこの時間で何か決定しましょうとか、そういう会という位置づけというよりは、先ほど話がありました、南区として保護者向けの7つのやくそくを、ひとつ集約した形で、方向性を今年度見出していこうということ、今日はその7つのやくそくに向けて、議論を少し深掘りしながら、それぞれの委員の先生方の専門性も生かしつつ、話を進めていくという方向性で進められたらと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

まず、今、事務局から資料の説明もございましたけれども、7月18日に、堺市の南区選出の市議員の方々との意見交換会をしておりまして、これまでの議論の内容を議員の方にも説明をしたところ、大台委員は、残念ながら所用で御欠席でしたので、このあたり、出席くださいました2名の委員の先生方、まずはどんな様子だったか振り返りつつ、議員の方々からの印象あるいは発言を振り返っていただいて、率直なところで今日はまず、ウォームアップしていきたいと思っておりますけれども。

外村委員、いかがですか。3週間ぐらい前ですかね。

外村委員

7つのやくそくというものをつくってはどうかということに関しては、全員の方が御賛成いただいていたということで、いいのかなというのはありましたし、こちらから投げかけるということについても、上からというか、行政から投げるといようなイメージは、そんなになんと言っていたので、少し安堵しました。

学習意欲と結びつけるためには、やっぱり読書のことについて、かなり時間を割いて語られていたし、読むことの重要性というのをとても感じました。

中村会長

そうですね。おおむね、南区の区教健で進めている議論について、応援するとか賛同しますという、非常に好意的な意見が大多数でしたね。前は、南区の選出の議員さん、全員出席なさっていたんです。そこで、一人一人御意見伺ったわけですが、特段の反対意見は全くなかったように思っていますが、竹井委員はどのようにお感じになりましたか。

竹井委員

私自身が、親向けの7つのやくそくという言葉に、すごく抵抗があるという思いがありましたので、そのことについて今おっしゃったように、そんなに抵抗感はないというので、少しそうなのかと、今まで保護者の方に話している中で、こちらがそれほど気をつけなくてもよかったのかなという思いがまずありました。

地域で育てる、声をかけていく環境づくりが、とても大切だということとか、基本的に、こういうリーフレットをつくることは賛成だという意見が多かったので、まとめていくことができたかと思いました。

やはり、読書のこととか家庭学習のことについては、課題があるということをおっしゃっていましたので、それについて何かいい手だてがあればと思いつきながら聞いていました。

ちょっと発言が離れますけれども、堺市はどのような読書ノートを使っているのかなと思って、私が現役のときにはまだできていなかったんですけど、堺市の読書ノートは、低学年用と高学年用とがありまして、これは堺市の子どもさん全員が持っているということで、あとは活用だなと思いつきながら聞いていました。

中村会長

確かに、竹井委員が冒頭おっしゃられた、「やくそく」という文言ですよ。これについては、会議でも慎重にやっていきたいと思いますということでした。継続的にこの表現の方法については、丁寧に進めていく必要があると思うんですけども、子ども向けの何かメッセージとか、子どもの教育とか成長を促すために、親自身がどうあるべきかという大まかな指針というものの必要性、これについては認めるどころだったと私自身も理解しております。

そういった意味で、これから議論を深めて、この7つのやくそく、どういった項目を盛り込む必要があるのかということについては、議論をさらに深めていく必要があるかと思っております。

さて、我々南区としては、先ほど事務局からお話がありましたけれども、今日の資料の2などに示されていますように、この7つのやくそくそのものを打ち出すことが目的ではないと。つまり、何が目的かという、昨年度来、ずっと議論しているんですけども、何か思いつき、あるいは感情的に何かを出そうということじゃなくて、その根拠というのをきっちり押さえた上で、進めていく必要があるというところは、一致して進めているわけです。

ですから、今回、名称はまだ確定はしていませんけれども、親向けの7

つのやくそくを策定していく上で、エビデンスというのは大切にすることがあるだろうと。我々が持っている資料は相当あります。事務局も相当頑張ってくれていますので、こういったデータをひとつ、わかるような、見える化という形で7つのやくそくにも集約していきたいと、そういう方向性は持つておく必要があるだろうと思っております。

今日は、これを踏まえて、審議事項をもう一度確認したいんですけれども、今年度の審議事項は、「家庭・地域における教育・健全育成に向けた取り組み（学習意欲の向上と生活習慣の定着）について」ということです。我々南区としては、学習意欲の向上と生活習慣の定着、この2つの審議依頼についても、最終的には7つのやくそくにも集約できるような方向性で進めていければどうかと思っておりますが、いかがでしょうか。

今日は、この学習意欲の向上と生活習慣の定着を集約した7つのやくそく、最終的に集約していくもの、そういう方向性を踏まえて、学習意欲の向上と生活習慣の定着について、議論を進めたいと思っております。

まず、学習意欲の向上です。この場でも今年度入りまして、非常に深い議論が進んでおります。先ほど事務局からも報告してくださいましたけれども、学習意欲という言葉自体が非常に、ともすれば学力の方に行きがちですが、そもそも学習というのは端的に学力のことを指しているわけではないと。学びそのものなんですよ。この学びの意欲というのをどういうふうに身につけるかって非常に難しい問題だと思うんです。

そもそも学びに向かう力ってどうやったらつくのかという、ここを押さえていかない限りはなかなか進んでこない。学習意欲の向上、もう少しやわらかくいうと、先ほど言った学びに向かう力ですね、これをどう養っていくのかというのは、恐らく現場の先生方であっても、子どもを持つ親であったとしても、あるいは地域で子どもたちを見守る人たちにとっても、非常に大きなテーマになり得ることだと思うんです。

そういった議論と並行するように、2017年3月に、小学校・中学校の新学習指導要領が告示されていまして、その中で、「主体的・対話的で深い学びの実現」という文言が入っており、これは非常に重要だと思うんです。「主体的・対話的で深い学びの実現」という、いわゆるアクティブラーニングという言葉が、非常に前もって走って行ったんですけれども、最終的にはこの文言で落ちついたという形で出ています。

主体的、つまり、学びを自分のこととして学ぶということですね。そして、対話的、人との交流を通じて学ぶということに集約できるんでしょうか。そして、深い学び、これはそれぞれの学びの根っこの部分を関連づけて、学んでいこうというのが表向きの意味だと思うんですけども、さらに深い意味は、私は聞いておりますけれども、今日はそこの議論は、もちろん入っても構いません。

学校ではこのような学びという位置づけで、これから進んでいくと。2020年度から実際に進んでいくわけですので、我々の議論も学校で、こういう大きな変化が起こっている中で、家庭・地域の教育というのはどうあるべきかというのは、一貫性を持った学びでないと、なかなか難しいかなと思うんです。

さて、そこで、今日はそういった学校の大きな動きと、そして家庭・地域と我々自身の軸足になっている部分、ここと絡み合わせながら学習意欲、学びに向かう力をどうやって力をつけさせるべきか、もちろん学校は随分苦労されているわけですけども、家庭や地域でどういうふうなかかわり方というのが重要視されるのか、このあたりについて、まず自由に御発

言いたきたいと思っっているんですが、大台委員いかがでしょうか。

大台委員

私自身の仕事を通して、子どもとかかわっている中で、学びの主体性というのは非常に大切な部分だと思うんですけど、なかなか本当に難しく、子どもたちからすると、学習とか学びというのは学校で教えてもらうものだと捉えている子が多いんじゃないかと思います。

低学年の子どもたちを見ていますと、平仮名1つ書けたとか、ちょっとずつ新しいことができたり、新しいことを学んだりということがうれしいことだというのは、みんな子どもとしては自然にわいてくる感情だと思います。ただつまずきとか、頑張りをなかなか認めてもらえないようなことが積み重なると、その意欲がだんだん低下していつているのではないかと思ったりします。

私自身、主体的であるためには、自分が一步踏み出そうと思わないといけないと思いますし、そのためには南区の調査では、自尊心というところは高いとは出ていたと思うんですけども、もう一つはこのまともにもある成功体験ですとか、自己効力感といいますか、やったらできるんじゃないかなという、自尊心からもう一步、そういったところを持っていかないといけないと思うんです。

自己効力感ってどうやって持つかと、成功体験もそうだと思うんですけども、私自身が感じるのは、子どもたちや学びとちょっと遠くなっちゃうかもしれないんですけど、所属感といいますか、居場所といいますか、自分もちゃんと家族の一員として役に立てたり、こういうことができるということを、実感していくことは、自己効力感につながるんじゃないかと思いますし、それが主体的な学びにもなっていくんじゃないかと思う部分があります。

まだちょっと、僕自身の中でまとまりはないんですけども、もう1個は、学ぶことは何のためかと考えると、主体的に学んだこと、力をつけていったことを発揮して、社会で生きていける人間になっていくためだと思うんです。なので、1人で学ぶことではなくて、社会性を伴うといいますか、そこから誰かと共有したり、誰かと分かち合ったりするのが大事んじゃないかと思ったりするんです。

私自身、いろんな子どもたちと話す中や、困っている子どもたちの中には、アウトプットがうまくできない子たちがたくさんいると感じます。そんな子は、自分の気持ちもそうですし、学校で読書感想文を書くような場はあるんですけど、なかなかそれが出てこなかったり、どういうふうにアウトプットしたらいいのかがわからなかったりすることが多くあると思いますので、何か力をつける経験する、自分の中でため込むだけでなく、それを外に出すというところが、私としては大事だと感じています。

中村会長

非常に重要なところだと思うんです。主体的というのは、実はかつての学習指導要領にもずっと書いてあることなんですよ。ただ、対話的で深い学びというのは、今回新しいんです。まさに、大台委員がおっしゃられたように、みずからの学びが、どのような関連を持つのか、それは他者との関係性を通じて身につけて深まっていくというような位置づけだと思うんです。

一方で、アウトプットについては非常にハードルがあるという大台委員の御指摘ですけれども、私は大学の教壇に立っている身として、外村委員と情報をシェアしたいぐらいなんですけど、学生はプレゼンがすごく苦手というか、余りしたくない、一言で言うと。

つい先日、ベネッセの全国的な調査もありましたけれども、大学生に、「どんな授業がいいですか」というと、「簡単に単位取れる授業がいい」と。つまり、何を言っているかということ、私たちが求めている学びの像と、実際に学んでいる側のミスマッチというのが、起こらないようにしないといけないと。

大学も非常に大きな変化で、アクティブラーニングを取り入れようということで、学生に発表の場所を与えたり、グループディスカッションをさせたり、非常に細かなことをやろうと思うんですけども、なかなか学生自身が、もちろんやれと言ったらやるんですけども、進んでやるような状況に持っていくのに、どうしても時間がかかったりするんです。積極的に学びに向き合うというのに慣れていないというのがあると思うんです。

外村委員、どうですか、このあたり。先生の大学で、大学生で見られることというのはありますか。

外村委員

大学生は、先生が、「こうです」と言うのを聞いていくのが大好きで、パワーポイントの資料もあったほうが良いという感じです。自分たちで何かをやってまとめなさいというのは非常にしんどがって、しないことが確かに多いかなという気はします。

ただ、振り返れば、私もそうでした。発表したりするのが苦手ではなかったですけど、できれば避けたいというようなところはあった気はしますし、多分、今の親御さんにしたら、学ぶということは知識を得るということで、対話によって深まる、主体的なというのは自分がやらないといけないというのはわかっていますけども、対話をしながら学びを深めるというイメージが、きっとできにくいかと思います。

中村会長

そうですね。本当に対話を通じて学ぶというのが、どこまで掘り下げてやれるのかというのは、新学習指導要領に載ってはいるんですけども、これが進んでいくと、当然家庭や地域の教育を変更、あるいはそもそも、この学びに向き合わないといけない時期が本当、目の前に来ていると思うんです。

どうでしょう、竹井委員、小学校と大学生とでは随分違うと思うんですけども。

竹井委員

今年に5回ぐらい学校現場に行かせていただいて、私は算数なんですけれども、先生方の研究授業の講師としてお話をさせていただいているんです。みずから考え、表現するという言い方では、これまでからずっと重要事項として、研究授業のポイントとして、みんな取り組んではきています。だから、かつてのように、もちろん一斉授業という形態もありますけれども、算数の場合ですが、だんだん変わってはきています。

ねらいがあって、課題があって、先生が出した問題に対して、自分なりの考え方をノートに書く。それを、表現し合ってまとめていくということ

なんですけれども、自分の考えがまず書けるか、書けないかで、ちょっとそこでハードルがある。書けたとしても、自分の考えと人の考えとを比較して、どこが同じでどこが違って、こういう理由で自分のほうがいい、こういう理由で相手のほうがいい、というふうなところを、それこそ対話しながら深い学びに移っていくところがすごく難しいです。

そこまでいかない場合もあるんです。本当に静謐な学習環境の中で、そういう学習が経験できる、そうしていくと、どんどん自分の考えを書くようになっていく、これが1番すばらしいですけれども。1つの問題を解くにしたって、1つの解き方でオーケーじゃないよ、違う解き方も考えてもらんなさいというような形で、授業は深まっていくんです。ところが、公教育の場では、その静謐な学習環境をなかなか、子どもさんの特性みたいなものがあるし、いろんな子どもたちがいる中で、教師は授業をしていかないといけないので、本当に一筋縄ではいかない場合もあるんです。そういう場合は、その子たちが、座って取り組めるような授業にしないとけない場合だってあるんです。それが現実です。

だけど、いきなりアクティブラーニングが出てきたんじゃないで、これまでからも主体的な対話的な学び、それを深めるというところまではいかなくても、そういうものをねらいにして、学習は進めてきています。成果は上がっている場合もあります。だけど、プレゼンするとか、一からまとめるとか、読書感想文を書くとか、算数での卒業論文を書くとか、そういう取り組みも既にしてきているんですけれども、なかなか難しいです。

論理的な思考、力をつけていこうと思ったら、何かに対して答えはこうだよというのではなくて、いろんなポイントの言葉があると思うんです、家でもです。子どもさんが言っていることについて、パパッパッと親が答えを言ってしまうのではなくて、「それ要するにどういうことなの」とか、「例えばどういうことなの」とか、「ほかにどんなことがあるの」とか、「なぜなの」とか、「どうすればいいの」とか、そういう子ども自身に考えさせるような言葉、それは学校でもよく言うんです。授業を見せてもらったときでも、「どう思う」って聞くだけでいいと思うんですよって。先生がすぐ答え言ってしまったたりする場合ね。「どう思う」って、こういったことを子どもに返すことが、考える力を育てることになるんじゃないかな、というようなことがよくあるんですけど、それは家でも同じだなと。具体的な言葉を通じて、抽象的にまとめていく力は、学校ではもちろん大事にしていかないといけないと思うけど、家庭でも親の言葉かけ1つで、育っていくものではないかという気がします。

それともう一つ、いろんな体験している子は強いなと。体験に基づいて、興味を広げていける。それは、ひしひしとします。

中村会長

いろんなお話、出てきたんですけど、ついつい途中で深掘りしたいような話もたくさん出たように思うんです。算数の話からなさってくださいなんですけれども、話の文脈の後半部分で、答えを求めがちな部分というのはあると思うんです。算数なんか特に、正解というのがあって、そこに向けて正解を求めがちな部分というのはあると思うんです。ところが、その対話を通じて身につくものというのは、実際、正解と思われていたところに、近道で行くことじゃなくて、いかに納得して実感していくかということによると思うんですけれども、このあたり、最近の教育現場というのは、先生行かれて、特に算数で実感や納得というのは、本当に子どもたち

は感じて学んでいく、あるいはその難しさとか、そこまで時間がないとか、こういった問題が出ているんでしょうか。

竹井委員

時間の問題というのは、すごく大きいです。この授業でこういうことをクリアしないと、次の時間に進めない。算数というのは積み上げなので。だから、どうしても授業の形として、子どもたちにいろんな考え方をださせて、それは認めるけれども、最終的にはいつでも使えるいい方法はどれかとなってきます。それは、公式に結びつけることになったりします。いきなり公式を教えて、これはこれに当てはめてという授業じゃなくて、いろんな形はあるけれども、例えば面積の求め方にしても、体積の求め方にしたり、特にいびつな形をした面積の求め方だったら、全体から欠けている部分を引くのとか、一つ一つパーツを足していくとかいろいろあるじゃないですか。

そういうふうな、いろんな角度から見られるようなことを学んだ中で、どれが一番やりやすいかという。やっぱり算数というのは、最後は単一化という、簡単に考えられるようにならないといけないと思っているので、そういうようなことはしていきます。それで、納得してくれる子も多いですが、なかなか1つずつ当てはめていかないと、というような子もいます。

中村会長

算数や数学というのは、抽象概念の本当に象徴的なものですよ。ですから、ここに実感とか納得というのをどういうふうに入れるかというのは、非常に難しい問題なのかと。つまり、主体的で対話的で深い学びというところと、いわゆる抽象概念、教えないといけないところのマッチングの難しさというのはあると思うんです。

大台委員が先ほど、冒頭におっしゃられた学習に対するつまずきとか、あるいは勉強してもおもしろくないとか、恐らくそういったもののきっかけって、算数や数学であることが多いんじゃないかと思うんです。

どうなのでしょう、大台委員。これはちょっと難しいんですけど、抽象的な勉強というところにつまずく子どもたちというのは、やっぱりいますよね。そこで、この実感とか納得とか、そういったものを、味わわせることの大切さみたいなのは、どのようにお感じになりますでしょうか。

大台委員

竹井委員もおっしゃっていたような、論理的に考えていたりですとかというのが、社会に出たときの問題解決するところにも、やっぱりつながりはあると思ったりするんですけども。

つまずいている子どもたちというのは、特性もあるでしょうし、背景はいろいろだと思うんですけども、なかなか整理されていなかったりすることが多いと思います。ペースもそれぞれでしょうし。

私が感じるのは、サポーターさんや、先生もそうですけど、ちょっと横について、思考の道筋を一緒にされたり、放課後時間とってゆっくりその子のペースで、みたいところが大事だなと思ったりするんです。そこでされているのは、ペースもそうなんですけども、モデルといいますか、思考のプロセスを一緒に踏んでもらうことが大事なんじゃないかと思ったり

するんです。それがぱっと、自分で獲得できる子もいれば、なかなかそこが難しい子もいて、そこで家庭では、保護者が一緒に宿題や、学習していくことで、思考のプロセスをフィードバックしてあげながら一緒に整理することが、経験積んでいくと、きっとその子はそういったプロセスを自分で踏めるようになっていくと思いますし、そういった一緒に学ぶみたいところが、学びに対してはメリットが大きいと感じます。

中村会長

今、おっしゃられた思考のプロセスを同時に踏んでいくということですね。これは、恐らく学校教育の現場では、非常に難しいことなのかもしれないですね。もしかしたら、家庭でならしやすいのかなど。どうでしょう。学校でやれていないということを申し上げているわけじゃないです。先ほどいろんな問題が、それこそ35人学級だったら、少なくなったと先日の意見交換会で市議員の方はおっしゃられたけど、その35人学級でもやっぱり多いですね。ですから、そういったところで、本当に思考のプロセス同時に踏んで、主体的で対話的で深い学びが実現できるのかということも、あると思うので、そこは学校・地域・家庭と、その学びの一貫性のところにつなげていけるように思うんですけれども。

竹井委員

正直なところ、TTでやったとしても、なかなか全部に行き渡らないし、2分割、3分割でやったとしても、やはり、子どもの一人一人の力に応じたというのは難しいです。だから、宿題とかで出たときに、家でちょっと見てあげたら、つまずくところって大体同じなんです。そのつまずくところを、ちゃんと気づかせてあげたらクリアできるところが多いんですけれども、家庭学習でそれができれば、こしたことはないです。

中村会長

もう一つ、今の議論も非常に重要だと思うんですけど、竹井委員が先ほどおっしゃられた、すぐに正解を言わないということは、大台委員もおっしゃられた、ともに思考のプロセスを踏んでいくということと一緒に思うんです。一緒に考えながら、一緒に整理していくと。大人は答えを知っていても、すぐに正解を言わないと。もちろん、子どもって今、簡単にスマホとかで調べたら答えが出てくるので、正解主義に走りがちですね。だからこそ、すぐ苛立ったり、切れたりするところも無関係ではないと僕は思っているんですけれども。

答えに対して一旦保留することの大切さというのは、恐らく教育の中で非常に重要になっているんじゃないかと思うんですが、外村委員、実際に家庭っていろんな問題起りますよね。学習ももちろんそうですけれども、この学びを深めるためにということはどうですか。

外村委員

まず、待つことができないことが、親に多いかなという気がします。私は看護師なので、患者さんの対応をするときに、待つことが看護やでいうのをまず習うんですね。患者さんの主体性を引き出すために、こちらから積極的にはかかわるけれども、とりあえず待ちなさいと言われてきたにもかかわらず、親になるとそれがなかなか難しいというのはあると思います。

す。

先ほど、聞く授業が学生は大好きと言いましたけれども、看護の学生ですので、実習と一緒に出るんですけども、そこではそれこそ対話による教育が、綿々と続いていきます。そのときに、私も注意しているのは、やっぱり待つということです。今の学生さんは、先生もおっしゃったように、答えをすぐに欲しいし、それが引き出せるマニュアルをくれと言うんですが、そうではないと。いろんな考え方を通って、最後にここに着地してほしいから、とりあえず待つ。自分で考えることを促すというところを、常に考えてやっています。

そうすると、「何で」ばかり言うんですけど、「何で」「何で」って聞いていくうちに、やっぱり考えることができ、アウトプットしないとだめですから、何とかできるようにはなっていくんです。そう考えると、大きな学校の場面ではできないにしても、1対1、もしくはもう少し多い人数で、対話をしながら教育をしていくということは、ある程度効果があるとすれば、それは小・中の中では、家庭なのかなと思います。

実際、お仕事されている親も多いですし、余裕を持って子どもと対応できるかという、難しい問題があって、思い出せば「本読みするから来て」と言われても、「はいはい」って言いながらやっていたし、だけど、そこで一旦「今日何やってきたの」とかを聞いてあげたり、「お母さん、わからないから教えてほしいわ」と言ったりできるような余裕を親も持ち、この対話による深い学習を親も理解しないといけないということを、発信する必要はあるのかなと思います。

中村会長

非常に深い議論になってきたと思うんです。これ、対話的なところって非常に重要で、我々科学の世界でずっと生きてきた人間で、外村委員は科学と臨床と、ずっと行ったり来たりの研究をなさっていると思うんですけども、ともすればどうしても正解を知っているものですから、こうなればこうなるよという形のものを、知っている者としては伝えたいと。ところが、それは往々にしてうまくいかないわけです。特に、看護の現場はもちろんそうだし、大台委員の現場もそうだと思うんです。こうだと言われていることが、その人にとっては全然当てはまらないとかいうところで、臨床でしか踏めない思考のプロセスというのがあると思うんです。そのあたりは、きちっと整理すべきだろうと。

家庭においては、世の中の子どもはどうであっても、うちの子どもは違うということはあるわけですから。唯一無二の存在である子どもに対して、どのようななかかわりをするのかということ、極めて重要だと思うんです。

竹井委員に少しお伺いしたいんですけども、このあたりの対話的な問題の中で、先ほど外村委員がおっしゃった時間ってありますか。親は非常に多忙だとか、いろんな社会的なシステムの問題があって、子どもとなかなか一緒にいられないというのがあると思うんですけど、実際、実感として、子どもとの時間が長ければ長いほどいいんでしょうか、そうじゃないんでしょうか。

竹井委員

子どももそんなにたくさん話すことがあるわけでもないんで、ただ、聞

いてほしいときに聞いてあげられるかどうか、そこは親の力だと思うんです。そんな30分もとうとうとしゃべるようなことなんてないでしょう。せいぜい5分、10分の話のタイミングを親の都合でシャットアウトするか、手をとめて、聞いてやるかだと思うんです。

ちなみに、私も共働きのときは、いい親ではありませんでしたけど。今はばあばとして孫にかかわっておりますので、すぐしゃべりたがるので、そのときはしっかりと手をとめて聞いてあげられます。こういうふうにすればよかったなと思っております。

中村会長

まさに、そのお話は、大台委員が現場でお感じになっている部分かと思うんです。時間的な問題ではなくて、タイミングとか、たとえ30秒とか1分でも、すごいすとんと落ちることというのはあるんじゃないかと思うんですが、どうでしょう。

大台委員

竹井委員、おっしゃるとおりで、僕も時間が長ければという話ではないと思います。タイミング、本当に大事だと思いますし、先ほどの待つことですか、質問を返す話のキャッチボールを促進するような聞き方ですか、姿勢が、子どもにどう伝わっているのかと思うので、自分が大事だと思ったことはちゃんと聞いてくれるなという、ポイントについてタイミングを逃さずにとというのが、ずっと続けるのは現実的に無理だと思うんですけども、ここだけはというのは逃さないとか、何かそういうことなんだろうと思ったりします。

先ほどの竹井委員のお話にもありましたけど、保護者だけだと難しいというのはすごく感じるので、そうやっておじいさん、おばあさんがかかわってくれている子どもたちは恵まれていると思いますし、そのあたりを突き詰めていきますと、家庭だけというのは難しいので、地域や行政、第三者がかかわっていくような部分があると、より望ましいんだろうと感じます。

中村会長

姿勢がどう伝わっているかという、それに尽きるんでしょうか。親であれ、地域の人でもそうだと思うんですが、そのタイミングいかんによって、その場だけの問題ではないのかもしれないですね。それまでの見せ方とか、立ち方とかふるまい方、そこに収れんしていくような気がします。だからこそ、この7つのやくそくの意味というのが出てくるのかもしれない。先ほどのどうしても答えを求めがちでという話も、7つのやくそくの方向性として、こうしなさいということではなくて、これも活用しようという、極めて臨場的なニュアンスで伝わっていくことを非常に望みます、

外村委員、親のデータと子のデータというのは、非常に強くリンクしているものがありますよね。例えば、睡眠と食事もそうなんですけども、それは1つのエビデンスではあるけど、それも活用するような伝わり方というのが、僕は今日の議論なんか踏まえても、望ましいんじゃないかと思うんですが、いかがですか。

外村委員

そうですね。理由がわかって、お伝えするということは大事だと思うんです。子ども向けの7つのやくそくというのを見ていたんですけど、家族と話そうってまきに出ているんですね。なるほどと。イメージとしたら話すこと、コミュニケーションをとることが大事だと思うじゃないですか。だけど、話すことによって相手の言葉を聞いたり、それを考えることで、学びが深まっていくというようなことが附帯してついでに、ちょっと違ったイメージで、親としては、じゃあ話そうかとなるのが可能なのかと思いました。

だから、教育的なかかわりができるような働きかけを受ければ、それがアウトプットできて、子どもに対して、ちょっと面倒くさいけど話を聞こうかと思ったりするんじゃないかなと。今、話してきてくれているからチャンスと思えるようなことがあるのかなという気がしました。

今、思い出したのが、うちの学生で、相手が聞いてくれるという姿勢を見せてくれると、本当に話しやすいと。今までの学校生活では、自分が言うことに対して、あまりみんなが反応してくれなくておもしろくなかったけれども、看護の学生なので目的が一緒だから、で、よく聞きなさいと言われるので、すごく聞こうと思って聞いてくれると。すごくうれしいと言っていたんです。きっと、それが子どもたちにももちろんあるだろうし、対話ということの本当の意味が何かというのは私も説明はできませんけれども、話を聞く姿勢とか、そういうのを全部含めて考えていく必要もあるのかなと思います。

中村会長

本当にいいお話ですよ。対話的ってやっぱり難しいですよ。今日の議論の冒頭で言いましたが、この根本には、外村委員がおっしゃられた、傾聴が基本だと思うんです。聴く、傾く、ですよ。ここがないと、対話にもならない。だからこそ、これは幼少期からだと思うんですけども、人の話をよく聞くというところがないと、主体的なところでの自分に対する振り返りとか、内省も、生みにくい状況が出てくるんじゃないかなと思うんです。

日本の教育っていいなと思っているのは、私も小さいとき「よく考えなさい」とかよく言われたわけです。この指導って結構いいんじゃないかなと今、改めて思うんです。こうせい、ああせいじゃなくて、ちょっとあなた考えなさいという、そういったところも必要かなと思いますね。

大台委員、どうでしょう。心理学的なところも入ってきているかと思うんですけど、対話と傾聴ってかなり関連性があるように思うんですよ。

大台委員

安心できるというのは、対話のスタートとして大事だと思うので、私自身も相談とか聞かせてもらう立場なので、評価するわけでもないし、合っている・間違っているを伝えるわけでもありませんし、まずはしっかりとお話聞かせてください、あなたのことが理解したいんですというのをしっかりと伝えることが対話のスタートだと思うので、いかに安心してしゃべられるかということだと思うんです。

きっと、子どもは子どもで言いたいことあっても、子どもなりに親の様子を見ながら、今だったらいいかなとかを考えながら、一生懸命話しかけ

ているのではないかなと思うと、親から声かけてもらえたら、きっと話しやすいだろうと思います。

中村会長

やはり対話的というのはキーワードだろうと。これは主体的・対話的というのは並列になっていますけど、これを通じて深い学びの実現というのが、新しい方向性として示されると。これは、家庭も地域にいる人間もしっかりと理解しておかないとだめだと思います。その中で、対話的というところには、安心して話せるような環境とか、傾聴の姿勢とかというのがベースになってくるだろうと思うんです。

これは、親として、あるいは地域の人として、子どもたちとかかわるときに重要な姿勢ではあると思うんですけども、一方で子ども側に立った場合に、どういったことが深い学びに最終的につながっていくのかというと、実感とか納得とか、そういう身体性を帯びたものじゃないかなと。例えばすとんと落ちるとか、何かわかったとか、そういう腹の中で喜べるみたいな、そういうものを伴うものじゃないかと思うんですが。

竹井委員は、長く子どもと接してこられてますけれども、わざわざ学習指導要領で言わなくてもずっとあったと思うんですよね。これまでのたくさん見られた子どもの中で、主体的・対話的でかつ深い学びというのは、どのように実現、あるいはしてきたのか、子どもたちがどういう気づきの中で育っていくのかというのは、どう見られていらっしゃるでしょうか。

竹井委員

私が現職のときは、やはり一斉授業で、初めはちゃんと子どもに習得させる。獲得じゃなくて習得させる。習い得させると。そういう時期が長かったんですよね。だけど、もっと子どもに問題意識を持たせてというふうになったのは、ゆとり教育のころからです、実際に現場が変わってきたのは。

総合的な学習の時間が入ってからは、課題自体を子どもに探させるときもありましたし、大きな課題は与えて、それぞれのアプローチをするのか、例えば環境問題にしても、二酸化炭素の濃度をはかる子どももおれば、車がどれだけ空気を汚しているのかを調べる子どももおれば、葉っぱが光合成で二酸化炭素を取り入れて、酸素を排出するのは本当なのかというのを学ぶ子どももおれば、いろいろだったんです。そういう学習のときは、すごく主体的に子どもは取り組みますし、課題が違いますので、その子一人一人と対話することになるんです。「その後、どういうふうにするの」とか、「何が必要」とか。そういうのはありました。

中村会長

子どもたちの動き、学びの中で、実感とか納得というのは、何か入りますかね。

竹井委員

子ども自身が失敗も含めてやっていますので、納得はしてますし、それをポスターみたいに書いて、みんなに発表するときというのは、すごく自信を持って言っています。自分がしたこと、ほかの子は知りませんので。

中村会長

それはすごいことだと思うんです。子どもが、自分の言葉でちゃんと表現できるということを、まさに言っていることですよね。要は、借りてきたような言葉とか、思考とか考え方で、自分を表現するのではなくて、自分の体験とか経験にしっかりと基づいて、自分の言葉で表現できる。そういったものが、大切なことなんじゃないかなと思うんですけども。

竹井委員

私は、算数科で取り組むことが多かったので、その得たデータをどのようなグラフにするとか、どのような表にするとか、それをどういう言葉で表現するとか、そんなことを、こちらもおもしろくやってきました。

もちろん、ふだんの教科書にある中で納得というか、テストでわかっている、わかってないというのもあるんですけど、やっぱり自分で試行錯誤しながら取り組んだというのは、子どもはすごく好きですね。なかなかできなくなってますけどね。

中村会長

難しいですね、でもすごく重要だと思うんですけど、自分の言葉にちゃんと体が乗るといふか、経験が乗る。本音できちっと表現できるということですか、そういうことは大学生もすごく難しそうですよね。どこかから借りてきた論文を、そのまま上滑りみたいにしゃべる、それがあたかも何かできる人間というふうに思われがちだけど、実際は違うんでしょうね。

外村委員、どうですか。学びをちゃんと自分の言葉で話してできるということの部分について。

外村委員

難しいですね。私の現場でいうところは、知識はもちろん必要なんですけれども、感性を問われることが多くて、同じことを患者さんに言われても、1人の学生はこう受け取って、1人の学生はこう受け取ると、もう1人はこう受け取っている。どれが正しいというわけではないけど、何でそんなふうに感じたのかと思うときに、自分の物差しになるものは今までの体験や知識だということがあるとすると、体験してなくても疑似体験として読書している学生であったり、映画をよく見ている学生は、下地というのか蓄積が少しあるので、それに基づいて反応できているなというところがあります。

なので、体験であったり、体験に準ずるものが多い学生ほど、感性は確かに豊かです。本読んでなくても、スポーツをずっと一生懸命やっていたというところで、いろんな壁を乗り越えてきていますよね。それが力になって、思いもしないようなことをポンって言ったりすることがあるので、そういう機会を家庭でもつくる必要があるだろうし、学校現場ではいろいろやってるとは思うんですけど、結局その子が好きだと思うことが大事なのかと。やらされていると思うと、全然だめなんですけど、自分が好きでやっていることは入ってくるんですよ。なので、親が本が好きで、横で一生懸命読んでいて知らんぷりということもあるんだろうけど、何かそこにきっかけになるものが1つ見つければいいんでしょうね。そこは対話かもしれないですね。

中村会長

そうですね。恐らく学校で体験活動が言われていたのは、そういった側面が大いにありますよね。いわゆる主要教科以外のところで、体験活動させて、いろんな気づきを持たせると。その上で、1つのあるいはその課題に対して、持続的に取り組むとか集中力を養うとか、そういったねらいがあったと思うんです。

そろそろ時間もいい感じに進んできて、まだまだここから掘り下げたいところでいつも終わってしまうんですけども、今日の議論の冒頭で、学習意欲の向上といったところで、じゃあ学びに向かう力ってどういうふうに身につけるのというところは、何となく、見えつつあるだろうと。学校は学校で、これから発問とか課題提出とか言葉かけとか、大きく授業の形を変えようとしていますよね。家庭においても、いろんな体験を通じて、集中力とか持続力とか、何か一旦取り組んだら、成果出るまでとにかくやらせるとか、そういった経験を積んでこそのことだろうと。それを続ける上ではいろんなつまずきもあるでしょうから、そこで対話的な部分というのが出てくるのかなと、今日は大分クリアに見えてきたんじゃないかと思っています。

学びに向かう力、難しいですね。学習意欲の向上って、本当に難しい。これは関係あるか、ないかわかりませんが、先日高校野球で東筑高校という九州の進学校が高校野球に出まして、負けてしまいましたけれども、その監督さんが言っていたんですけど、「僕は人間教育、野球ではしてない」と言っているんですよ。往々にしてスポーツを通じて、人間開発しようとかそういう発想になりがちで、私は健康科学の専門なものですから、その可能性は非常に信じているんですけども。一方では、人間教育自体はその高校ではしていないと。何でかという、それは家庭でやっていると言いはったんです。こういう高校はいいかもしれないけれども、そういう高校もあると。つまり、僕は野球を教えていると言っていました。

ですから、教育というところにおいては、家庭の力というのが当たり前ですけども、非常に重要だということ象徴しているようなコメントかなと思いました。ちなみに、その東筑高校とは非常に進学校で、毎年100人以上国公立へ行くような学校らしいのでそういうことが言えたのかもしれないけれども。

いずれにしてもいろんな事情の中で大きく教育指導要領も変わる中で、家庭や地域の教育への向き合い方というのは、変わっていく必要があるだろうということは、今日、もう一度改めて深掘りできたんじゃないかと思えます。これを踏まえて7つのやくそく、保護者が何をベースにして考えるべきかを、これからも掘り下げていく必要があるかなと思うんです。

最後に、生活習慣というところも、この7つのやくそくの中に入ります。生活習慣というと、運動、栄養、睡眠とこの3つ、大きな柱があるわけですけども、親としてもこの3つ、きっちり守っているところの子どもは、ちゃんと守っているというデータも出ています。運動している親の子どもは、運動しているという傾向がはっきり出ています。食事をきっちり守っているところの親の子どもは、栄養もしっかりとれていると。睡眠についても、しかりだということです。

この3つの柱というのは、7つのやくそくの中で、当然軸になってくることではありますけれども、学校での非常に特徴的な取り組みというのは、南区でもありますよね。例えば、「みんなく」と言われているもの、

三原台中学校で中核的にやっておられる先生もいらっしゃいます。こういう「みんなく」の考え方も、1つ注目してはいますし、先日の市長との懇談会の席上でも、私はみんなくされている先生もいらっしゃいますと申し上げています。この「みんなく」あるいは睡眠について、生活習慣を整えていくための学校の取り組みについて、大台委員は、どうでしょうか。

大台委員

学習に限らず、いろんな意欲をしっかり持って、保って、取り組んでいくには生活習慣は大事だと思いますし、今おっしゃっておられました、3つの運動・栄養・睡眠というのが本当にベースにあって、その上に学びがあるというのは感じます。

睡眠については、本当に私自身も「みんなく」に取り組まれている学校の先生方ともお話しすることがありますけれども、生活リズムが狂っていくと、いろんな支障が出るんですけれども、睡眠がいかに大切なのかとか、睡眠とはどういうことなのかというのを、子どもたちと一緒に学ぶといいですか、ちゃんと知識として睡眠ということ、1回立ちどまって考えましょうというのが、「みんなく」なんだなと感じたりします。先ほども、理由がわかって取り組めるというお話もありましたけれども、子どもたちもそうで、睡眠がどれだけ大事なのかとか、睡眠とはどういうことなのかとわかると、そんなに大事なんだということで、ここのポイントを捉えて取り組もうと思えばやすくなるかと思えますので、非常に大切な取り組みかなと思います。

竹井委員

私ごとですけど、孫が三原台小学校と三原台中学校におりまして、娘が三原台にある幼稚園の教諭をしております、「みんなく」のことは話題に上ることも多いんです。現実問題として塾とかに行っていたら、帰りも遅くなるんですけれども、早く寝ないといけないという意識として大事だなというのはわかっているように思います。ただ、私たちへの言い方としたら、「10日は早く寝るデーだから、宿題少ないねん」という言い方ですけども。とても大事な取り組みだなというのは思います。

外村委員

睡眠って、本当に大事で、皆さんも体験があるように、睡眠不足のときは非常にイライラしますし、食欲も落ちますし、消化吸収も悪いというイメージがあると思うんです。まさにそのとおりで、成長期の子どもにとって、睡眠は非常に重要になってきます。そこに、今スマホとかが侵食していますので、「みんなく」というか、よい睡眠をとろうとしたら、整理しなくてはいけないことが生活の中で出てくると思うんです。そこに今問題となっているところが出てきて、全部つながってきそうな気がします。

親自身も、何で睡眠が大事なのかということが十分にわかっていないというところもあると思うんです。スマホをしてすぐには寝られないというのは体験的にはわかっていますけど、何であかんのかということにもなるだろうし、そういうのがどんどん記憶というか、脳の中に蓄積していくと、習慣になってしまったりするので、中毒性ですね。やめないといけないというのを、早く伝えていかないといけないのかなという気がするのと、睡眠も大事、栄養も大事、運動も大事というところになってくると改

めて思います。

中村会長

本当に睡眠は大切ですよね。この3つの睡眠・栄養・運動の中でも、睡眠やっぱり中核ですよね。人生の3分の1寝ないとだめなわけですから。人生90年の中で30年は寝ているわけですよね。そう考えると、すごく重要なところだということにもかかわらず、親自身がその睡眠の重要性を十分に理解しているのかというところは、外村委員御指摘のとおりだと思います。

今日の議論の一番最初の、実感を持たせて主体的に対話的にいかに深く学ばせるか、これは睡眠ももちろんそうだと思うんです。大学で睡眠の話を、健康科学専門ですから教えますと、実感を持ったら変わるということを私自身は感じます。私は、睡眠の負債、睡眠不足、つまり睡眠の負債が重なると、どうなるかという科学的な話をとうとうとします。例えば、肥満になるとか言うと、女の子はすごく反応するんです。睡眠不足になると肥満になるよ、そういうデータ出ているよと言うと、「え、早く寝よ」ってなるわけです。結構、そういったところで実感を持たせるというのは、非常に有効に働くと思います。

中高年の方に対しては、睡眠不足、睡眠の負債が重なってくると、生活習慣病につながる、高血圧のリスクが高くなる、早く死ぬで、こういう話ですよね。そうなると、やっぱり早く寝ないといけないと、早く寝るためには非常に技術が要る、テクニックも要ると。外村委員がおっしゃられた、ブルーライトの問題もあります。携帯やスマホを見た後にすぐ寝られない。遅くまでパソコンしたら絶対寝られないわけです。そういった正しい情報というのを啓発していかないと、なかなか主体的・対話的な深い学びとしての睡眠というのが、腑に落ちないと思いますので、引き続き、我々としてはこのあたり重要視しながら、これからも議論していければいいかと思います。

今日は非常に一種、哲学的な、心理学的な内容も入りましたけれども、時間もそろそろ来ましたので、このあたりで終えたいと思いますが、何かありましたらお願いしたいんですが、よろしいでしょうか。

3. 閉会

中村会長

これをもちまして、本日の会議を終了させていただきたいと思います。議案内容に対する意見、何か不明な点ございましたら、遠慮なく事務局へ申し出ていただきたいと思います。委員の皆様には、貴重な御意見いただきまして、まことにありがとうございました。

事務局

皆様、本日はお忙しいところ本当にありがとうございました。

次回の会議は、10月を予定しております。改めて文書で御案内させていただく予定ですので、よろしく申し上げます。

以上です。どうもありがとうございました。

閉会（午後7時22分）